



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 61号 2010.5.17 発行 社会政策研究所

貧困はなぜ救済されないか。福祉システムと現実の矛盾、この問題意識がまた動き出した。池袋駅周辺で路上生活を送る人たちを支援する研究チーム「ぼとむあっぷ」の2009年調査で、ホームレス状態にある市民の半数近くに、知的機能に課題があり、地域や社会で単独で問題解決することが難しいということが分かってきました。ホームレス状態にある市民を支援してきた支援団体や医療関係者・福祉関係者が体験的に理解していたことでしたが、量的に実態が明らかになったのは日本で初めてのこと。「ホームレス問題は放置された障害者問題であった」ということ。これは「累犯は障害者問題であった」ということに続く発見です。問題解決の一つは生活保護の申請ですが、これらのホームレス状態にある市民を支援するためには、生活保護開始後も支援を継続していく必要があります。これを「ぼとむあっぷ」では、伴走的支援と呼んでいます。【kobi】

そして、朝日新聞の記事から

都心ホームレスの3割、知的障害の可能性 医師ら調査

(朝日新聞 2010年5月17日)

東京都心のホームレスの3割以上は知的機能に障害があるとみられることが16日、精神科医や臨床心理士らで作る研究チームの調査でわかった。精神疾患も4割以上にあった。知的機能を含むホームレスのメンタル面に関する専門家による初の実態調査という。ホームレス施策に障害者支援の視点も必要だと同チームは指摘する。

池袋駅周辺で路上生活を送る人たちを支援する研究チーム「ぼとむあっぷ」が、昨年末に調べた。本人の同意が得られた167人を対象に面接調査や簡易知能検査をした。平均55歳で全員男性。最終学歴は小学校が2%、中学校が56%だった。

その結果、軽度の知的障害がある人が28%、中度の障害の人が6%だった。知的障害が軽い人の精神年齢は9～12歳程度で、ものごとを抽象的に考えるのが難しい。中度では6～9歳程度で、周囲の助けがないと生活が難しい。

精神科医の診断で19%にアルコール依存症、15%にうつ病が認められるなど、41%の人に精神疾患があった。

研究チーム代表の精神科医・森川すいめいさんによると、周囲に障害が理解されず、人間関係をうまく結べないことで職を失うなどの「生きづらさ」が、路上生活につながった可能性があるという。知的障害により生活保護の手続きを自発的に取ることができなかつたり、精神疾患により気力が下がったりして、なかなか路上生活から抜け出せない現状がある。森川さんは「障害に応じた支援策が必要」と指摘する。(岡崎明子)



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行